

昭和二十四年七月二十三日
昭和五十五年十月十五日
第三種郵便物認可
発行（毎月一回・十五日発行）

（通第三七六号）

慈

光

第三十二卷

第十号

次

信を行く旅人……………池山榮吉…(1)

御一代記聞書抄（続・一二）……………井上善右衛門…(10)

自照日誌抄（26）……………西元宗助…(13)

聞思録抄……………菅田豊吉…(16)

念仏誌抄……………木村無相…(18)

自己を知る道……………花田正夫…(21)

信を行く旅人抄

池 山 榮 吉

私の入信の経路

さて私自身の入信の経路はどうであるか？ 自分のことだから一点のすきもなく、もれなく、くわしく、明瞭的確に語れそうなのですが、実際なかなかそうゆくものではありません。それはそのはず、もともと私の思うこととすることには私達自身に知られていない無数の因子がはたらいっているからです。まして信仰などという極めて奥深い、不思議なたましいの過程にいたって、とても自分の意識した材料だけで、十分の解説の出来る筈のものではないのです。

とりわけ絶対他力の信仰は、私達が信じようと思つて信ずる、言い換えれば、私達に信する意志の強固性があつて、その力で信するのではない。他力の方から信ぜしめられるのでありますから、どうしてもそこにX（エックス）という私達にはかり知れない因子が加わります。ですから、なおさらむづかしいわけでありませう。

が、實際―私が現に思つていようように―私の四十二の時

信仰にはいったものとして、そこに至るまでの経過を観察しますと、要するに矢張り、自己を見下げ果てたとき、絶対に信頼した人の手引きで信仰に達しました。具体的に云つてみると、自身の罪悪深重、煩惱熾盛に驚かされて、どうすることも出来なかつたとき、親鸞聖人のお言葉にしたがつて、念仏が申されるようになったのであります。これからすこしそのいきさつを申上げて見ようと思ひます。しかしとても完全に云い表わせるものでないのですから、そのおつもりでお聞きとりを願ひます。

真宗の家庭

何はともあれ、私が真宗の家庭に生れたことが、すでに私の意思のはからいを超越した、後年私をして名実ともに真宗の信徒とならせる一大因子であつたに違ひない。かう云うと真宗以外の家庭に生れた人は、はいり難いというように聞こえるが、それは必ずしもそうではない。真宗で居りながら、真の信仰のない人、否、名ばかりで無宗といつ

た方が極めて多いように、はじめは他宗、若くは無宗であつた人が真宗にはいり、真の信仰を得る人がすくなくない。かえつてその方が徹底し易い可能さあるぐらいであるが、真宗以外の人は真宗のいわれを聞く機会さえなくて終る場合が多いのに、その機会に接する可能の多いのは、真宗に生れた人に恵まれた強味であります。

母の感化

私の父も母も、代々真宗の家に生れた人でしたが、特に母には、何かにつけて篤信の傾向が著しうございましたので、その影響が自然、私の宗教性をすくなく刺戟しました。時々母から宗教の話聞かされたこともあり、説教の坐に連れられたものです。とりわけ私を最も強くひきつけ、真宗から離れにくくしたのは、母が重い病になつて助からないかも知れないと、母自身も思い、はたの者もそう思つた時―一度ならずあつたのですが―当時まだ小学生だつた私に云いきかせた言葉でした。「私は今度は死ぬかも知れない、死ねばお浄土へ参らして頂く。草葉のかげで待つてゐるから、お前もご信心を頂いて後からおいで！ そうですねいと親子は一世というから、この世かぎりでもうあることが出来ない。だから是非信心を頂かなくてはいい。でも、若しそういういかなかったら、いいや！ 私がお浄土から迎ひに来てあげるから」と、こつた母の言葉は

私の心に沁み込んで、大きくなつた後まで忘れることが出来ませんでした。大分信仰の道から遠のいてゐるな、と氣付くやいなや、すぐ思ひ出すこの言葉にひかされて、立ちもどらずには居られませんでした。

真宗鼻負

こつたことが因となつたのでしよう。長じて高等の教育をうけつた頃、積極的に信仰そのものは与えられてゐませんでした。真宗に対する鼻負の念はなかなかさかんなものでした。私の若い頃は、ただ宗教に無關心なばかりでなく、一種の反仏教的の氣風が知識階級の一部にただよつていた時代です。私の先生の中にもそうした傾向の人があつて、折にふれては矢鱈に仏教をけなしたことがありましたが、それにはどうも心服できないで、内心反感を抱かされたものでしたが、それがもし友人でもあつたら平生肉氣な私も、口角泡を飛ばして議論し合つたこともあつたのです。が、要するに外に對して、即ち、基督教に對して仏教を、他宗に對して真宗を弁護し、より正しく言へば鼻負したというに止まつて、内に―型としては心得ていたが―活きた信仰は、何もなかつたのであります。

信への憧憬

真宗鼻負は、真宗の信仰こそあらゆる信仰のうちで尊さにおいて無比である、という価値判断を予想します。この

判断がある限り、いつまでも単に最負というだけで甘んじていられません。二十を過ぎた頃から、内省の傾向が益々深まり、習性となるにつれて、成程真宗の教理は人生の實際にいかにも適切なものだという感じが、だんだん広く、力強く根を張るようになりまして、いつとはなしに最負の念が一転して憧憬の情と変わってきました。そこへ三十前後からの近角君との親交は、信仰的人格を現前せしめて、その憧憬の念を促進する動力を加えました。

清閑に恵まれて

私が六高の教授として岡山に到着くまでには、当時私の理想とした社会事業の実現に関して、だんだん失敗の歴史があつたのですが、この経験は私に自己の真相を看取するうえに沈痛な内省の資料を供してくれました。

岡山での生活は、私にとつては、東京・大阪でのそれに比して、何のことはない市井をのがれて、山林に隠れたような、至って清閑な、且つ清貧なものであつただけ、多年の懸案であつた信仰の憧憬をはたすうえに、静慮の機会に富んでいました。考えて見ると、この清閑と、清貧ということが有難いです。両者は私共のあれ狂うところの駒を、信仰の門戸に走らす鞭と拍車とであります。

光明の縁

私をして信仰の門戸に入らせずにはおかぬ段取は、こ

と、なんだか心苦しくなつて、人の期待にそむかない信仰の確立にあせりました。この心苦しさと、いい気持とが一緒になつて、あのくすぐったい感じをかましたのだと思います。

出にくい念仏

この頃、私が一人ひそかに手古摺った問題が二つありました。一つは念仏が出ない、と云つていくらい出にくいことでありました。これではどうも信仰の持主としてはいかにもおかしいと思わずにはゐられませんでした。そこでつとめて称えようとしたが、人前では一信者ばかり居るところでも一氣まりが悪くて、喉まで出かかつて来てもそこで押えてしまうのが例でした。一人の時でもなかなか出ません。かまどぐの奥にうずまつた小猫のように、無理に引張り出さない限り、出ようとしません。余程奮発しないと出て来ない。苦しまぎれに案じ出した最後の一策が、日頃口癖になつていた唱歌に代えて、念仏を口癖にしようときめ、うっかり唱歌が口に出て、ハッと気付いて念仏に代えるという、まことにおかしくもあり、いじらしくもある、飛んだ悲喜劇を演じつつあつたのです。

仏陀の存在

今一つは直接信仰そのものの有無、成否の問題で、如何

うして着々として、進捗して来しました。「十方世界を照曜する無碍光遍照の明朗なるにたらされて、無明沈没の煩惑漸々ととらけて」とはこうした過程をいうのではないでしようか。しかし「涅槃の真因たる信心の根芽わずかにきざすとき」というところまでとどくには、また幾春秋をおくらないではならなかつたのです。

開法の うろわかりして 春暮れぬ

洪柿のやがて洪抜け 日和とも (句仏)

人によると案外すらすらいれるのに一現にそうしたかたがここにも数名見えておいでです——洪柿のしぶとい私、うろわかりの煮え切らない状態から、思い切つて決定の信、横超の境へぬけるには、まだなかなかひまがかつたのです。

くすぐったい感じ

岡山の信仰界の人々は、はじめから私を遇するに篤信の人、決定的信仰の持主をもつてしました。私の方ではこれに對して、一種くすぐったい感じなしにはいられなかつたのです。長年信仰を求めて来たが、今ではどうやら手に入れた氣がする。人もそれをみとめているのだと思うとなんだかい氣持になつたが、どうかすると、我ながらこれでもいいのかしらと疑われるばかりでなく、時としては、持つていた筈の信仰が、また失われたと思われることさえある

にして仏陀——信仰の対象、救済の本体である仏陀の存在が信じられるかということでした。信仰の筋書、真宗の教理一般は、もうよく呑み込めていて、これ以上わかりやうのない程にわかっていると思つてゐるのに、肝腎の仏陀そのものが、或時はあること疑いなく、或時は——そう考えたくはないのだけれども——無いとしか思われなかつたのです。

出たり引込んだり

月の世界へ旅した裁縫師が、お月さまの注文で、上着を作ることになつて、寸法を計つたところ、背中の方がセムシのように丸く、腹の方が馬鹿に薄い。変な格好だとは思つたが、仕立てあげて着せると案外よく似合つた。ところが、一日一日とたつにつれて、だんだん腹がせり出してゆく。仕方がないから上着の前の方をほどいて、新しい布片を継ぎ足して間に合わせたが、しまいには球のようにまん丸くなった。それも束の間、背中の方がこけてきて、だんだんだぶだぶになつてくるので、仕方なしに、後の方をほどいて、余計なだけ切り取つてゆくうち、とうとう薄っぺらの腹ばかりになつた。そこでお月様が寝入りこんだのを幸に、こっそり逃げて帰つたという話がありますが、仏様があるなら有る、無いなら無い、とどっちか一方に決まれば手古摺ることもないわけですが、お月さんが満ちたり欠けたりするのと同じように、仏様が出たり引込んだり、

明るくなったり暗くなったり、まるきり見えなくなったりするのだから、やりきれたものではなかったです。

附会の方程式

たとえば信者同志が集って、信仰を語ると、この場合に大抵大慈悲の仏陀を争うべからざるものと予想する。この限り、人生の諸問題を觀察するのでは、どう話が進んでもつまりは一種の有難さ、喜ばしさを感ずる。その感じは信仰の結果、否、信仰そのものの発露だと思つと、自分が信仰に生きていることが疑えない。その時は嬉しくもあり、満足であるが、さて一人になって、一体大慈悲をもつて我等に臨む仏陀とは、どこにどうみとめられるのかと自問するとただ信ずるのだというだけでは追付かなくなる。何とかしてその存在の理由を見つけない。私が一番好んで用いた方法は、因果の法則を前提とする一種の方程式的推論でした。そこで善因善果、悪因悪果ということが争えない。ところで自分は果してどういう因があるかと考えてみると、現在の自分が罪惡深重にして、善根薄少であるところから見ても、過去も恐らくそうであつたろう。かりに悪が八分で、善がせいぜい二分とする。すると私は悪い果が多いはずなのに、私はどちらかというと樂天的であるから、私の主觀から推して、快不快の点からみて、そうとは思われない。それには私自身を支配する因果の法則の外に、私

常に責任感の強い人が、或きつかけから、自分が從來不真面目であつたのに氣付いて、それからというものは非常に煩悶に陥り、世間からは輕蔑または非難の眼で見られるように思ひこんで、くよくよとして引込み勝の日暮しをしていたのですが、妙に私を信頼して、私だけにはしきりに胸中の悶々を打明けるのでした。ところがそれを聞かされた私にしてみると、その人の悩みのたねになる材料は、私も負けずに持合はしたので、何のことはない、その人は私の面前に現われて、私自身を責めたてる私の責任感の具体化、私自身の満身の創痕から流れ出る血に塗れた私自身の影^{かげ}としか思えなくて、恐しくもあり情なくもあり、こつちも同じ煩悶に引摺りこまれやしないかと、ひそかにおじけをふるつたことがあつたのです。

大いなる蔑視

こうした自分の真相を深刻に見せつける機縁が、あちらからもこちらからも、私の身辺をめがけて押寄せて来た結果、とうとう二進も三進も行かない窮地に追いつめられて、ここにはじめて「大きい蔑視」に突き当たつたのです。

「お前達の経験できるものの中で、一番大きいものは何か？ それは大きい蔑視の時だ。お前達の幸福も、理智も道德もいやになつてしまふ時だ」とニイチエは言っていますが、それとは多少趣意はちがひますが、帰するところ

に加担するXの存在を推定する外はない。そのXとは何であらうか？ これこそ私でなくて何であらうと考えたのでした。

然し私の推定は主觀的評價ですから、その時、その時の気分によつて違います。得意の時は高く、失意の時は低く見積られます。だから厭世觀の強い人には全然駄目です。又若い希望に満ちた時には間に合いますが、年をとつて段々冷静になるにつれて不向きになります。

こんな風に、仏陀を予想したり、想定したり、その他或は宇宙の主体といったようなものと見なしたり、或は人類の愛や歴史のうちに認めようとしたり、手をかえ品をかえて、さまざまに試みてみるが、要するにこつちに工夫で作りあげたものは、こつちの心持、猫の眼のようにかわる心持一つでこわれてしまふ。で仏の見える時は得意、見えなくなると失望。それからまた見たいとあせる憧憬とが、走馬灯のように交々循環して、いつ果てるとも思えない喜劇悲劇を演じつつ、ここにも常没常流転の歎きをくりかえしました。

内省の促進

このように仏陀に向う態度が、一つところをお百度をふんでいたのと反対に、内省だけは絶えず進んで止まなかつたのです。或時はこういうこともありましたが、それは或非

は同じ大きい蔑視におちいつたのであつた。

良心の声

良心は容を改め、声をはげしくして私を責める。

「お前の心の動きを見つめてごらん！ お前は一体今何を思ひ、何をしているか。表面は体のいい賢善精進でつつんでいるが、うちには醜い虚偽不実が巣くつていてではないか。今にはじまつたことじやない。お前の過去を省みるがよい。反省にうとい人達は俯仰天地に愧じずなど、よく平氣で口にするが、この言葉のおそろしさを承知しているお前に向つて、その言葉通りの態度を註文するのは無理かもしれないが、たとえば公に関する問題に対しては、よし『公のみ私を忘る』とまでゆかずとも、せめて公を主とし私を従とするとところまでは漕ぎつけないものだ。どうだねそれが請合えるかね。お前の計画した社会事業の経営にしてもそう。お前もまさかあのくろくろみで、金銭上の利益を得ようとは思わなかつたろうか、あの種の事業の一番槍の功名はたしかに求めていたではないか。むしろこの功名心が第一の動機となつて、あのくろくろみが生れたのだとは、今ではお前も知つてゐる通りだ。勿論こんどばかりではない、これに似たことは沢山ある。お前の記録の糸を手繰つてごらん。ぞろぞろ出てくるだらう！ 公事でさえそうだが、純然たる私事に至つてはなおさらだ。お前はいつも自分の

利益を中心とし、それをするに便利だとなると、表に何とか理屈をつけたり、それさえもしないで、他を犠牲にすることを厭わなかった。どうだ思いあたったかね。いやしくも人と利害の交渉のある事で、お前のすること為すことが、実際そうでないのは殆んどないと言っている位だもの！何たる自利一点張りの人間だろう。たまには瞋目一番、思いを潜めて考えてみるんだね。もつともそんなことをすると、とてもじつとして居られなくなつて、假想の平和は忽ち失われてしまふかも知れないが。……

私の口から云いたくないが、実際お前を左右するのは、私（良心）ではなくて、お前の私心だ。ために目を後に向けてごらん。要所々々でありありと私心の跡が見出せるではないか。お前は眼を前に向けて遠くを見る間は、私の指図にまかそうと思つてゐるが、実行の一段になると、にわか私心の云う方に従つて、良心の私を袖にして「了」

虚名に甘んずる？

良心はこう云つて長太息したが、やがて語り続けたときは、その面に皮肉な微笑のかげが見えた。

「ときにお前は名譽が大好きだったね。お前の持つてゐる人生の理想は名譽だ、と云つても過言ではない。成程名譽もよからう、それに値する態度さえあれば！だがどうだね。お前はこれを考えて見たことがあるかい？お前のさき

目的のない生

目的のない生！それに堪えられたものではありません。千古の淋しさのただよう空虚。もしそれが満たされるとなら、羅刹の口にも飛びこむでしょう。自由はそのままにありながら、その持つて行きどころのない無期の精神的牢獄です。いかにもがいても、もたえようと、いかにのたうちまわろうが、どうすることも出来ないのです。

かなしきは あくなき利己の一念を

もてあましたる男にありけり 啄木

これが宿業の重荷を背負つてゐる男の運命です。煩惱にしばられた凡夫のおちこむ必然の陥井（かみで）です。罪惡を餌食とする大龍は、その底で口を開いて待ち構えているのです。

ああ信仰がほしい

すでに名譽の方が駄目とすると、私は浮世に望みを絶たなければならぬ。それは名残りやしきの極みであるが仕方がない。社会人としての生命はつきたも同然である。この生き甲斐のない世の中に、唯一の残されたものは超人的希望、即ち信仰である。考えてみればこんな破目に陥つて、息づまる苦しさにあえぐのも信仰がないせいだ。信仰さえあつたなら！

ああ、信仰がほしいものだ。ぐつと思いをひそめました。光の一閃（せん）をもみがすまいと。心の眼を一杯に見張りなが

に観察した心の態度、昔からかわらない、かえようともしない、またかえようと思つても恐らくかわるまいところのお前の心の態度と、お前の一番求めている名譽と、両者の間に何の矛盾もないかね。そうした心の持主が名譽を得たにしても虚名にすぎないではないか？」

失われた中心点

骨を刺す良心の声は私を驚倒せしめました。黒闇々の空洞に投げこまれたのです。名譽、私にとって何より大切な名譽。私の人生における唯一の願いのまゝであり、向日葵（ひまわり）における日輪のように、私の一切がそれに向つてゐる名譽。それに値する資格のすこしも無いとは、私の良心の批判なのです。それに対して私は一言もない、全部を承認せざるを得ないのです。私の立つてゐる地盤が崩れ出して足の踏みどころがなくなつたのです。生活の中心点が失われてしまつたのです。

言うまでもなくこの時には私の信仰は崩れていました。

今まで往生極樂を願う衆生としては信仰、人類社会の一員としては名譽を、唯一の目的として追求して来たのが、一は高峰の花、一は水中の月、手には取れないものとなつてしまつたのです。「茫々たる恨には渡に船を失うが如し、濛濛たる憂には闇に道に迷うが如し」にわか盲目になつたと同様、どう生きて行つたものか、さっぱり見当がつかぬ

ら。

弥陀・観音・大勢至 大願の船に乗じてぞ

生死の海にうかびつつ有情をよぼうてのせたまう

呼び声

この時だったのです。どうしたことか私の念頭にフトあの親鸞聖人の告白

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信するほかに別の

子細なきなり」

という御文（ごぶん）が浮かんだのです。その刹那、半ば、あわただしく御文を引寄せするように、半ばひとと御文に引付けられるように感じながら、私は一心身をこぞつて一途（いちど）に御文の中に没入した、と思う間もなく、忽然としてある衝動を感じました。

そうだ！私も聖人と一緒に！とうなづいて、心に「親鸞」とあるのを「私」と、「よき人」とあるのを「親鸞聖人」と読んだと思つた途端（とたん）、一声、南無阿弥陀仏と称えたのをきつかけに、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、出水に堤が切れたかのよう、滔々として高らかに、とどめなく念仏がほど走り出たのであります。

そうです。念仏が出たのです。あの言いくかつた念仏が出たのです。しかも続けざまに淀みなく、生れて初めて

念仏が、何の懸念もなくすらと称えられたのです。

この間、私は未曾有の莊嚴な靈感にうたれて、今までの淋しさ、苦しさ、やるせなさ、一声一声の念仏に、拭ったようにかき消されるあとから、何とも云えない心強い、頼もしい感じが、心の底から湧きあがるのを覚えて、ハハア、これが信仰というものであったかと、初めて思い知つたのであります。

「夫れ真実の信樂を案ずるに、信樂に一念あり、一念とは、これ信樂開發の時尅の極促を顕わし、広大難思の慶心を彰わす」私は今まで述べてきた私の体験で、この聖人の信卷末の冒頭の文を読まして頂いたと信するのであります。それは私の四十二の時でありました。世間で云う男の最大の厄年に、前念に命終して後念に即生する。大悲廻向の大信心を獲させて頂いたことは、一入ありがたさにたえない次第でございます。これと申すと、一に親鸞聖人のお手引によりましたので、この歎異抄の第二章は、私にとっては私の信仰を確立せしめた如来の金言であります。

樹心弘誓の仏地

「慶ばしい哉、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す」これについては後日、ゆっくりお話し申したいと思いますが、私はこの樹心仏地と云う趣きを、やはり第二章で心的事実として味読さして頂きました。

金剛の信

この時をもって私は信仰は、流転の域を免れない疑情の境をはなれて、金輪際ゆるぎのない仏地の地盤にたてられたのであります。

それから十余の星霜を重ねて今日に至るまで、時に多少の濃淡はあつても、本質的には一貫して始終かわるところがありません。かつて持て余した二問題は、ひとりでに解決されて、念仏も称えられれば、仏の存在も問題にのぼりません。のみならず、その仏は、体験前には、ただの仏陀であり、如来であつたのが、その仏に固有名が冠せられて、阿弥陀仏でなくては納まらなくなりました。

弥陀一仏

阿弥陀仏のほかにどんな仏があつても、それは私と何等の交渉がないとわかつたのです。

「唯、念仏の衆生を觀じ給いて、攝取して捨てざれば、阿弥陀と名づけたてまつる」念仏申さんと思いたつころのおこるとき、攝取して捨てたまわらないのは、弥陀一仏であります。その御いつくしみを頂いて、その御名を称えまつる、それは自然の理であります。こうして自然に念仏する心持は、如来よりたまわりたる信心として、己・今・當の信者を通じて一つでなくてはならないのです。願わくば親鸞聖人の仰せに聞いて、聖人と同じ信心を頂いて、念仏成仏是真宗と、同じ道をたどりたいものであります。

御一代記聞書抄（続・一一）

井 上 善右衛門

前々住上人仰せられ候。仏法者には法の威力にて成るなり。威力でなくば成るべからず、と仰せられ候。されば仏法をば学匠物知りは言いたてず、ただ一文不知の身も信ある人は仏智を加えらるる故に、仏力にて候間人が信をとるなり。この故に聖教よみとて、併も我はと思はん人の仏法を言いたてたる事なし、と仰せられ候ふ事に候。ただ何知らねども信心定得の人は仏より言わせらるる間、人が信をとる、との仰に候。（二三六条）

一 釈尊が病める跋迦梨比丘に対して、老耄のこの身を頂礼しても何にもならぬ「法を見るものは我れを見る、我れを見るものは法を見る」と申された言葉は、仏教の何たるかを明らかに示すとともに、西洋の宗教との根本的な相違を私どもを気づかせて下さる大切な言葉であります。

仏陀とは覚者と訳されますが、それは法と一体化した人格の活動態と申してよろしいでしょう。では「法」とは何であるか、それは言葉では言い尽くし難いと思いますが、強いて言うならば、究極の宇宙的眞実とでも申してみましよう。すべてのものがそこにおいて究極の統一と活動をえしめられるものが眞実であります。白井成允先生の遺詠に、弥陀仏のみちかいゆえに天地の 自づからなる寂けさに入る

という一首がありますが、この「寂けさ」の一語には深々の味いが宿る事を感じます。それを單なる静寂ではなく、大いなる統一の姿であり、それが「和」の原理ともなつて果しない活動を現じる力ともなります。仏典にはよく「諸の菩薩は功德の法に安住したまえり」という言葉が出てきますが、この安住こそが揺がぬ統一と活動の姿を語るものです。

仏法は相対的な人間能力のわざでは全くありません。それを人間の知性や理解力で捉える事の出来るように思うて振舞うことは、はかなくも悲しむべき事です。宇宙的な究極の真実は、それが真実であるが故に、総てを包み、遍く一切にゆきわたり、その故に人間の理性をも感情をも包み貫くものであります。ここにこの私が法に關係せしめられ否な關係せずば済されない所以があります。これが「法の威力」といわれ、その威力が私に関わり来る働きを、「如来の加威力に由るが故に」（信巻）と申されているのであります。

二

本条では以上のところを、前々住上人（蓮如上人）が「仏法者には法の威力にて成るなり、威力でなくば成るべからず」と仰せられたのです。仏法者とは言うまでもなく真実信心の人を指します。

ところが、その仏法者たることを、人間の理知で獲得できるかのように思うて、仏典を解読して人間の思考する義理を述べたてる。しかしそれは法を人間の觀念に拘替えるものです。觀念とは意識の描く輪廓ですから、影のように形はあっても中味はない。それは法の真実とは全くその本質を異にしたものです。その事を「されば仏法をは学匠物知りは言いたえず」と申されています。

三

「此の故に聖教よみて、併も我はと思はん人の仏法を言いたてたる事なし」と。自我への固執が破られて、法の真実に照らされるところに仏法が開かれる。しかるに聖教の理解力を頼りとし、我こそはと力むということは、仏法に名を借って我執をつのるわざに外なりません。それはまさに法の真実に逆行する所業です。どうしてそこに仏法を語り明すことが出来ましよう。かかる誠めが繰返して述べられていることは、我々の反省すべき深い傾向性がそこにあるからでしょう。

聞法とは法を耳で聞いて理解することではなく、法をこの身に頂戴することです。ところがそれがなかなか頂戴できない。「難中至難」という言葉もありますが、それは法がこの私にとって難しい困難なものであるがためではなく、十重二十重に自分を執我の砦で固めてきた久遠劫来の迷の壁の厚さによるものです。身の迷の遠く深い事を思えば、至難の至難たる所以もうなずかれ、いよいよ聞法の一道に邁進せずにはおられません。

最初に述べた釈尊のお言葉にもうかがえるように、法と人とは二つにして一つであります。法は人において顕現し、人は法において真に生かされる。その人法不二の真実に接して「身をもって法を聞く」より道は残されていません。

「ただ一文不知の身も信ある人は、仏智を加えられる故に、仏力にて候間人が信をとる」と。仏智とは一切を貫ぬき照す法の働きであります。この仏智に照らされたとき始めて人間は真実の世界に出る。それが即ち仏心の照耀を蒙るといふことであり、その照耀に摂め取られた体験こそが信であります。泥水に天上の月がさながらに照り映えるがごとくです。だから信の原語プラサーダは澄淨という義をもちます。祖聖は「満足大悲円融無碍の信心海」と仰がれました。満足とは完全無欠ということ、大悲とは私の悩みがそのまま如来のやるせない悲しみとなる一体化の状況、その故に如来の一切の徳を私のものとして与えずはおかぬ大悲と表裏相離れぬ真実心の働きです。しかもそれが真実自体である故に、何ものにも碍えられず一切に円かに融合することを円融無碍と語られました。才市老人が

「ありがたいなあ

照らしぬかれて

照らしとられて

ナムアミダブツ」

とうたつたあの信境であります。

仏智の真実に浴する人は、仏力の中にある人です。だからその仏力が接する人を信の世界に誘導する。これは理屈ではなく確たる事実であります。

決して理知の物知りに法を求め頼るのでなく、信心定得の人に親近するそのことが、仏の力に催される所以となるのです。そして私どもも聖人が汲まれたその同じ泉の水をまた親しく汲ませていただく身とならねばなりません。

流 転 坂

田 端 明

一 ころげて起きてまたころぶ

辛いさだめの人生を

重荷を背負い生きていく

諸行無常の流転坂

二 浮世の風にさらされて

生きる人生一人旅

涙を拭いて生きていく

諸行無常の流転坂

三 あらしにもまれ倒れても

一つ心の母子草

しあわせ抱いて生きていく

諸行無常の流転坂

自照日誌抄 (26)

——光りに照らされながら——

西 元 宗 助

静坐社の主催で、さる八月二日・三日と恒例の夏季静坐会が京都農林会館で催される。柳田誠二郎先生（元・日航社長）はじめ約百余名の方々と共に私も夫婦も参坐出来たのは幸せでありました。

静坐とのお縁は、京都大学入学と共に結ばれる。わたしは羽溪了諦先生（当時・京大教授）の知四明寮に入れていただいたが、姿勢のよい先生の健康法は岡田式静坐法によるものであり、しかも私の入寮前には足利浄円先生を時にお招きして静坐し、御法話を承ったことのあることなどを知らされた。

もともと虚弱で、しかも落着きのない私は、高校時代に参禅したこともあって、その静坐を学びたいと願うにいたり、小林信子先生の静坐社に通うことになった。爾来五十年に近い。

尤も私は岡田虎二郎先生を教祖のように仰ぐ一部の方々にはいささが辟易し敬遠せざるを得なかった。その意味に

前日、わたしは小浜の故・向島諦宣師（師の三回忌法要は本年十月十日）のお寺にお泊りいただき、当日朝、後嗣の諦信君運転のクルマに向島師未亡人と同車して参る。

明応寺は山麓にある奇麗なお寺。住職の四明さん（京都女子大教授）ご夫妻、それに御兄弟や御親戚、ならびに御法中の方々も参集。やがて定刻になるとお孫さんに抱きかかえるようにして、九十一才になられた利子老刀自（了諦師未亡人）が本堂にお姿をお現わしになる。

七回忌、ほんとに早いもの。大谷本廟での先生ご葬儀の日はお盆の最中でまことに暑い日であった。その折、参列されていた吉川幸次郎博士も大原性実勧学も、今はすくない。感慨ひとしおである。

わたしは「師主知識の恩徳も骨を砕きても謝すべし」のご和讃を誦しつつ、先生を憶念して一場の法話を述べさせていただく。先生は晩年、ご恩ということをよく口にせられた。ご臨終の前々日、病室にお伺いした折も、「ありがとう、ありがとう」と仰せになった。それが昏睡状態にあったの仰せであるだけに感銘の深いことでありました。

なお法要後、さるところにて御供養のご馳走にあぶかったが、その席でご門徒の方々、「了諦さん、了諦さん」と懐しげにおっしゃる。これに気づいた私、大先生のことを「了諦さん」とは、これ、生れてはじめてお聞きします、さす

おいて信子先生について静坐を修得しえたことは幸せであった。信子女史が信仰上において帰依し師事されたのは足利浄円先生であり、金子大栄先生でおありであつたから。

ともかく静坐のお縁は、まことに有難い。多忙な日を送りがちな私。小閑をえて、しばし目を軽く閉じ、肩の力を抜いて腰骨をたて、あごを少し引いて鳩首（みずおち）をおとし、息を静かに下肚に納めて吐いていく。それはなんともいえぬ境地である。そういえば千葉の娘から、小学三年の息子（即ちわが孫）を夏休みに京都にやるについて、おじいちゃんからは背骨を立てることを教えてやってくださいと云ってきたのは、嬉しいことでありました。「なお本年十月十二日には岡田虎二郎先生の御郷里、愛知県田原町にて、先生追慕六十年祭が催されることになった」。

羽溪了諦先生の七回忌法要が、八月十日（日）、福井県速敷（おにう）郡の御自坊・明応寺で行なわれた。そのため

がは門徒総代さんと、お酒をつぎながら云々と門徒さんたち、当惑したように、私も多年、了諦さん／＼と親しみお慕いしてまいりました。京大教授になられても、博士さんになられてからも、口を揃えておっしゃるので、それはそれと、あらためて感じいったことでありました。

○ ○ 広島の妙好人、斉藤正雄翁（八十六才）が、ついにさる六月七日、ご往生になった。そのよき未亡人からご芳信をいただいたので、その一部を披露させていただく。

せんだつては丁度、お浄土の応接室みたいなお便りを有難うございました。浄円先生や甲斐先生がたお揃いでお楽しみになるお室のようで、さぞ有難い句や美しい絵をお描き下さることでございましょう。その中をあちこちして賑やかにビールを飲んで廻る亡夫を想像してみますと、お念仏も楽しいもののようにございます。私は凡夫の最たるもの、寒くても暑くても三度の食事は欠かさず、意地悪もやめられず、元気で頑張つて居りますので御安心のほどを云々。

「註」この文中の浄円先生とは、翁の師事された足利浄円先生のこと。甲斐先生とは、虎山画伯、和里子ご夫妻のこと。

この齊藤翁はまことに聞法をもつて生涯を貫かれ、その信心には底のぬけた光りがあった。お宅に伺うと、まず短いお経を仰せになり、それから法談を、であった。そしてそれが一通りすむと、楽しんで酒・ビールを飲まれた。その間、令夫人は、いつも微笑をたたえておられる。その光景が今もお眼底にある。真宗学者、石田充之教授の夫人は、その息女であられる。

× ×
光りに照らされながら
暗い影をみつめながら
行き着くところまで



和上曰く。鋤鎌（すきくわ）になうて行く人は問わずとも、その田野（でんや）におもむくものと知れ、網や釣竿をさげて歩むものはおのずからに漁場に行く人と知れる。我等の平生の心中、いかなるものを持って日を送るかを反省すれば、おのずから行く先が知れるぞ……。

聖人の御著述には、この親鸞の言葉を信ぜよと仰せられたことは、ただ一度もない。あの正信偈でも、七高僧の御化導をならべて、唯この高僧の説を信ぜよと仰せらるる。三国歴代の高僧は、ことごとく大心海化現の御方々であるから、このお言葉を信ぜよ。親鸞もこのお言葉を信じさせて頂いている。かようにご自身が愚痴に還りて、共に信じたいとの御化導であるから、よく信者の胸におちる。

○ 某青年が、和上に

「お浄土はほんとうにありますか？」

とお尋ねすると

「お浄土以外に真実なものが、この世にありますか」と応答せられた。

聞思録抄

お慈悲の鏡に向え

悲

自己の顔の姿は自分では見えぬ。是非鏡に向わねばならぬ。自己の心の姿は自分ではわからぬ。是非お慈悲の鏡に向わねばならぬ。自分では自分の真の醜い姿がわからぬゆえ、自分は善いものと自惚れるのである。

然るに一たびお慈悲の鏡に向えば、醜い姿がありありとわかり、慚愧にたえぬ。鏡はいつも照らして下さるけれども、自分の毒気をもつて鏡面を曇らして、自分の真相を映らせぬようにする。故に仏の代理者たる同行から、鏡面を拭うてもうることが必要である。

自分の姿が鏡のおかげで明らかにわかったからとて醜い姿は少しもかわらぬ。併し、この醜い心を飽くまで憫み給う仏心を仰げば、わが醜い心を忘れて、ひたすら御恩を喜ぶばかりである。これが、至心信樂已を忘れた味である。

七里和上 語録抄

純他力

誉田豊吉

酒に色々とまざり物のあるのはすぐに舌にわかる。信仰にまざり物のあるのもすぐわかる。酒は生粹なものに限る。信仰も純粹なものに限る。信仰の純粹ということは、我執なく、唯仏力にのみに頼ることである。絶対の他力を頂けば、絶対に自分の罪惡、無力、無常がわかる。唯仏力にまかれ其の他を顧みぬ。

自分は現在仏に抱かれて、未来浄土に往生さしていただく。これほど安樂なことはない。自分の将来について心配はいらぬ。宿業のままになるようになる外はないが、仏がいつもよきようにして下さる。仏以外何物にもたよらぬ。仏のみによって安心する。これが即ち純他力の味である。

凡夫の腹底

凡夫の腹底はいつも五分五分である。ほめられたい、損

をしたくないという心が根底をなしている。かく親切をし
たならば人もこの親切を感じ自分を徳とするであらう。お
金を出してやって置けば、後には返済してくれるであらう。
されば自分は損をしないで親切者の評判を取ることが出来
ると思うのである。

若し先方が親切も感ぜず、借金も返済せず、かえって怨
言を云いだすときは、忽ちに瞋恚の心がムラムラと起るの
である。自分がこれほどのことをして置いたならば、将来
キット結果があるだろうと待ちもうけるのが五分五分相対
の凡夫の腹底である。或はまた、自分に何か不都合な事を
して先方から叱られるときに、自分はわるいに相違ないが、
先方も自分のような境遇になったら、やはり自分のように
不都合とは知りつつやったに違いないのに、あまり先方が
同情がないと怨むのである。境遇がわるい、先方がわるい
というのは、やはり五分五分の根性である。

我等凡夫は腹底がまちがっている。故に踏み出しが間違
っている。この間違いなることを知らずに、自分の思うよ
うになったときは得意がり、思うようにならぬ時は失望落
胆、憤慨悲歎する。実にこれが凡夫のありのままの姿である。

各人の孤独の旅

一家内にありて、親子、兄弟、夫婦など集りて、外面は

共同提携して賑やかなようなれど、その内面をうかがえば、
各人それぞれの業にひかれて、唯ひとり地獄の途をトボト
ボ辿っている。親子、兄弟、夫婦の間にも互に明されぬ秘
密、苦悶、不平がある。ここに各人孤独寂寞の影を見ざる
を得ない。この一人一人の心の奥を知りぬいて、同情に堪
えず、いつもいつも附添うて浄土の道に導き給うが如来で
ある。われらは如来を知らずしては、孤独の旅人である。

(註) 一人でも行かねばならぬ道なるを

弥陀にひかれて 行くぞうれしき

蓮 如上 人 詠

南無阿弥陀仏だけで安心

われらはなにか結果を掴みたいのである。お念仏だけで
は物足らぬ感じがする。南無阿弥陀仏は慈悲の塊りと聞い
てもそれだけで承知せず、その機能がほしいのである。

われらの苦しめる心は必ずしも物質では助からぬ。苦し
める心は楽な心により、汚れる心は清浄な心により助けら
れるのである。我等、至樂清浄の仏心によつて苦惱濁乱の
煩惱を救うて貰うのである。我等は南無阿弥陀仏だけで安
心すべきである。

念仏詩抄

帰命の一心

香師おおせに

己(おの)が心をもつて

名号を信するの信にあらず

名号に具足する信心が

あらわれたる帰命の一心なり

香師 香樹院徳龍師

帰命の一心

ナムアマミダブツ

帰命の一心

ナムアマミダブツ

名号こそが

帰命の一心

木 村 無 相

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

後生大事の思い

香師おおせに

罪つくりながら

地獄もおそろしからず

信を得ずして参らるる

ように思うほどの

取りちがいはなければ

そのわけのわからぬ無明の闇を

光明で照らしやわらげて

くだされたシルシが

後生大事の思いなり——”

後生大事の思い
後生大事の思い
ああ

後生大事の思い
わが力ではとても
ならぬ

光明のお照らし——
光明のお照らし——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

聞くも称うるも

香師おおせに

“仏法は尊重の思いで
聞かねば

その法をおろそかにするバチで

その法は聞かれぬとある——”

聖人ご和讃に

“不退のくらしすみやかに
得んと思わん人はみな

恭敬の心に執持して
弥陀の名号称すべし”

聞くも称うるも

恭敬・尊重の思いにて

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

それ思い知らすは

香師おおせに

今日のわれら

業のキズナにつながれぬ
ことは一つもない

ご開山は

兎の毛・羊の毛のさきに

とまるほどのみじんばかりの

ことも

みな過去の業とおおせらるる”

それ思い知らすは

他力廻向の

信心の智慧——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

とうしよう

香師おおせに

“法を求むるスベも

知らぬ身に

願わねばならぬコトワリ

のみこませて

法を聞く心をおこされて

聞かせたもう——”

このご恩——

とうしよう

とうしよう

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

近信

七月二日（月）夜十時 無相

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

今夕から、これだけ書けましたゆえ、とりあえずおと

どけさせていただきます。

手紙はまた書かせていただきます

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

合掌

自己を知 る 道

花 田 正 夫

「汝自身を知れ」とソクラテスが提唱したし、このことの大切さは誰もよく知っているけれど、実際には非常にむづかしいことである。

ゲエテの語録に「人は自分自身を知ることを務めねばならぬと云う格言がある。昔から繰返して今日でもよく人の云う事だが、さて不思議な事には誰一人その言葉に従った者もなく、将来も誰一人も従いそうにもない。人のすべての感覚や行為は、自分の周囲にある外の世界と関係するばかりで、自分の内にある精神的の事には注意する折がない云々」と、そのことの必要さを認めながら、その至難さを指適している。

仏語に「鏡は如何に立派でも、鏡自身を写し得ないように、如何なる智慧者といえども、身辺三尺は暗闇である」とある。

然し、一般には自分のことは自分が一番よく知っている

と思ひ勝であるが、身びいきな心があつて、自分の善さうなことは誇大視し、都合の悪いことには目を塞ぐ、かくて自分の正体とはほど遠いものになっている。

孔子は「十指の指差すところ」を大切に聞けと云う。成程、自分が見る自己判断よりもその方が数倍正確であろうが、相対五分五分の人間には、冷たい裁きの心が支配してゐて、それを聞くに堪えないものがある。

又「子を知るは親にしかず」とも云う。それは、親は子に向う時、いつも子の身になつて理解してこれを見守る。而も、どんな子でも親にとつてはかけがえない愛し児であり、白金や黄金にまさる宝息子である。

我々は、自分を価少評価されるとひがんで腹を立て、反對に過大評価されるとうぬぼれ、偽善におちる。どちらにしても、落着けないが、すべてを知る親の前では落着く。然し煩惱具足の身の悲しさに、往々にして盲目の愛におちる。

最後に、一切の衆生をわが一人子と見そなはして下さる、慈悲窮みなく、智慧限りましまさぬ仏陀の御眼に写る我等の姿こそ、我等の正体である。ここで仏陀の御目に写る自己、について述べよう。

他山の石として、パスカルの言葉を引こう。「キリストによつて神を知り、神を知ることによつて自己を知らされた云々」とある。

私自身は、親鸞聖人によつて弥陀の本願を知らされ、本願によつて自己が照らし出されはじめていたので、その点を誌したいと思う。

仏の本願の生起

親は子になくはならぬことのために昼夜に辛苦するよう、私は衆生に必要にして十分なことのために、本願を發起して下さるのである。だから、その本願をおこされずには居られないのは何のためか！と自分を省みる時、仏の御目に写る自己が照らし出される。

親鸞聖人の常の仰せには「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」とある。

聖人もまた、本願をよくよく仰がれては、そこに、煩惱具足の身が業縁に催されてつくつた無数の罪業の身に気づかれて、このために永い間の御思案と、御修業を続けて下されたことよと、洪恩を謝し続けられたのである。

歎異抄の著者、唯円大徳は、この聖人の仰せがそのまま善導大師の二種深信、特に機の深信——自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に沈み、常に流転して出離の縁あることなき身と知れ——という金言とすこしもたがわせおわしまさずと述べている。即ち本願を仰がれるところに、大師も聖人も、御自身の煩惱具足の全体を明らかに見出されたことを知らされる。

ここに、聖人が四十八願のうち特に大切に頂かれた五つの願を仰ぐことにする。

第一に、必至減度の願、弥陀仏の御力で浄土へ生れさせて頂けると信ずる一念に、この世に住むうちに、浄土へきつと生れるに相違ない位に入らせ、必ず仏のさとりを得させずにはおかぬ、との仏の御願いであります。

例えと、身から出た錆で、刑務所に収容された人が、そこで初めて、真実に念じつづけて下さるのは親ばかりと、一度親心の真実に気づくと、身は刑務所にありながらも心は親のもとに帰るのである。やがて刑期満ちて親の家に直

ちに帰るように、娑婆の縁つきた時、浄土に迎えられて仏と同じさとりを得させて下さるのである。

ここに必ず至らしめんとあるのも、摂取不捨の御誓いによるので、我々はよろこぶ心もおこらず、浄土に急ぎまいりたい心もない、煩惱の奴隸の身は、いつも脱線し続ける故に、どうあろうとも捨てはせぬぞの御誓いをして下さらずには居られなかったのである。

第二に、光明無量の願・智慧の働きの無限で照らさぬところはならないようにしたいとの願である。どうしてこの願が？と仰ぐ時、我々は到るところでやりそこないがやまぬ、煩惱熾盛な身の故に、恰も乱暴者の子には親がどこどこまでも眼がはなせぬように、常に見護ってやりたいとのみ心である。安芸の篤信な人が「見てござる、見てござる、恥ずかしいことじゃ、有難いことじゃ、南無阿弥陀仏」と云いながら麴を売っていた。これも人が見ていないと麴の量を誤間かしたくなるにつけて、如来様が知ってござると念仏にかえらされたのであった。

第三に、寿命無量の願、これは、我々がいつまでたつてもさとりがひらけず、独り立ちが出来ぬのを憐れまれて、いつまでも護り続けて、独り立ちの出来るまで、成仏する時まで捨てはせぬとの御誓である。

第四に、至心信樂の願、は聖人が信の巻に、詳しく解釈

ちと、小慈小悲もない我等は、自分一人は成仏出来ても有縁の人々と縁ぎれになつてしまふ。或る死刑囚が最後の日に「今日は私の新出発です。この世では何一つ自由はありませんが、浄土へ生れさせて頂いて自由自在の身とならせて頂いた時、罪の償いも、受けた御恩がえしもさせて頂きます」と別れを告げた。又、浅原才市同行は

才市いくつになつた

六十五になつた

この世の日の暮は

あの世の夜明けなり

御恩うれしや

南無阿弥陀仏

と讃えている。その才市の在所をわざ／＼訪ねた読売新聞の松本記者が、才市の絵像には、二本の大きな角が描かれていたと、その絵姿を同紙に紹介している。才市同行も本願に照らされた自己の煩惱熾盛の恐ろしさを知っている。更に鳥取の源左同行について、信友の故辛川忠雄さんが「京都で源左さんの妙好人としての伝記を出版したいと云っているが」と同行に賛成をもとめたら、「めつそうなことをして下さるな。この肉体のある限り、何時手がうしろにまわるようなことをしでかすかも知れませぬ。どうか、こればかりはとりやめて下さい」と拝むようにしてことわ

して下されている。至心をお誓い下さるのは、我々が遠い昔から虚仮不実で、真実の心もなく、清浄な心もないのを悲憫されて、それを融かして転悪成善せしめずはやまじとのみこころである。信樂も、我等は真実に信じよるこぶ力もないことを見抜かれて、かかる身をもわが一人子と深く信じて下さり、やがてその念力に我々も打ちまかされて信ぜずには居られないようにしたいとの御誓いである。欲生の御誓いも、我々が如来に向う心もなく、唯煩惱に繫縛されて、はてしない苦海に沈む身を捨て給うことなく、如来から救いの御手をさしのべて下さらずにはおかぬとの御誓いである。

唯終りに、唯五逆と謗法の者を除く、とあるのは、親子を叱るように、そういう重い罪をも犯して、悪いときえ思えぬ我等への大きなお叱りである。叱りは相手の身になりきって下さる心から生れ、怒りは、自身中心の冷たい裁きの心であるが、この大叱をうけて、我等の足下にハッと気づかされるのである。

第五に、還相廻向の願、煩惱具足の我等も浄土に生れさせて頂くと同時に、仏と同じさとりと自由な身とならせて下さり、願いに応じて再び娑婆世界に帰り、縁ある人々の手をとって、のこらず同じ浄土に導き入れるようにさせたことの願である。この御誓がましまさぬと、はかないいの

れたと聞かしてもらっている。ここにも聖人の「さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすし」との仰せを身をもって味っているのが知らされる。

以上、本願をよくよく仰ぎまつる時、自然に仏がどうしてもそうせすにはいられない、我々のたすかる所のない煩惱身が明らかに知らされ、そこに自己を知らされるのである。もし仏の御目に写る自己の姿を拒否または無視する時は、自己の姿は永遠に闇の彼方に消えるであろう。私はかつて手乗り文鳥を飼っていたが、或時、その前に鏡をおくと、そこに写る自分の姿と思わず、しきりに攻撃をはじめた。それを見ながら、仏眼にすでに写し出されている自己をこの小島同様に気付かず居たことを慚愧させられた。聖人が「聞かすというは、仏願の生起、本末を聞いて疑心あることなし、これを聞かす」と、聞法のかなめとして、仏が本願をおこされずには居られなかったことも、よく聞け、と仰言ったことも、我々が、とかくひとごとと聞いて、我等には、それがなくては永遠に浮かぶ瀬ないことのために御苦勞下さっていることに気付かないでいる、即ち私のための本願であるぞとお知らせ下さったのである。

(お盆を過ぎた日稿す)

あとがき

伝わるので、技術や方法や何如ではないことを知らされます。

十月二十六日に、京都市右京区山田開町、浄住寺、榊原徳草師の宿坊で、例年通り一道会が催されますについて、池山先生の「入信の経路」を、「信を行く旅人」から転載いたしました。信心の人の存在は、明月を仰ぐに似て、そこに太陽の光の照りかえしに接するよう

うに、弥陀仏の徳光を拝する趣きがあります。染香人のその身には香氣あるがごとくなりこれを即ちなづけてぞ香光莊嚴と申すなり井上様は、とかく仏法が身につかず、観念論に墮し易いことへのきびしい反省をして下さいました。法然上人も、学匠沙汰をきびしく誠められていたことも思い併せました。

西元様の文中に、羽湊了諦先生の七回忌、向島諦宣師の三回忌の事が書かれてありますについて、私自身の京都での生活はこの両師に負うところが多大でありましたことを追想し、且つわび、且つ謝しまつりました。

故・菅田豊吉様は、かつて福岡の師範学校に在任中、沢山の人々に法灯を掲げて下さった方です。よく宗教々育が問題になります、一人の念仏者があれば自然に信徳が

九月の初め、大阪の榎本栄一様からあたにかいおたよりを頂きましたが、その中に「無相さまからは念仏の真音がきこえます。このごろ人相も一層よくなれたと感心しているのですが、訪問客が少し多すぎるようでお疲れになりはしないかと、ふと気がかりになることもあり」とありました。

本願のおこりをよくよく知られる時、そこに仏の御目にうつる私共の、過現未にわたってどうにもならぬ煩惱熾盛の全体の姿が照らし出され、祖聖の常せや、善導大師の機の深信もうなづかされるのであります。そうした点をすこし述べて頂きました。皆様の御叱声をお願い申します。

御案内

時、十月二十六日午後一時
所、京都市右京区山田開町浄住寺
市バス、京都駅より苅寺終点下車
新京坂、桂乗り換、上桂下車

京都一道会

御案内

- 毎月第一、第三日曜、午後一時半
一道会例会。一道会館の南隣り、南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。
- 地下鉄、新瑞橋終点下車。
- 教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四毎月二十四日、午前・午後。
- 市バス、御器所通り又は北山下車。
- 地下鉄、御器所通り下車。
- 蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。(但し日曜を除く)尾西市三条板倉名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定 価 半 年 七〇〇円(送共)
一 年 一四〇〇円(送共)

編集・発行人 花田 正夫
電話八二一局七〇三七番

印刷 愛知県西加茂郡三好町大字福谷
刷 人 坂部 光雄

発行 所 慈 光 社
振替口座 名古屋 一〇四七〇番
郵便番号 四五七